

受験番号	
得点	

一

問一 ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____

問二 ア _____ イ _____ 問三 _____

問四 聞 は 見 に 如 か ず

問五 a 詞 b 詞 c 詞 問六 I II

問七 _____ 問八 _____

問九 (1) _____ (2) _____

問十 _____

二

問一 ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____

問二 ア _____ イ _____ 問三 _____

問四 _____ 見えた。

問五 _____

問六 _____ 問七 _____

問八 _____ 問九 _____

三

問一 ① _____ ② _____ ③ _____ 問二 _____

問三 _____ 問四 _____ 問五 (1) _____ (2) _____

問六 (1) _____ (2) _____ 問七 _____

*字數制限に際しては、句読点や「」等も一字として数えるものとします。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

空耳というのを誰でも聞いたことがあると思う。実際には音がしていないのに聞こえたり、呼ばれてもいないのに名前を呼ばれたような気がする。最近では、英語の歌詞が変な日本語に聞こえたりすることも、若者のあいだでは「ソラミミ」と言うらしい。

実は、それと同じようなことが、目で見ていることに対しても起こる。それをここでは仮に「空目(ソラメ)」と呼ぶことにする。

A 「聞は見に如かず」とか「自分の目を見たことを信じなさい」とはよく言われることだが、実は、私たちが自分の目で見て「事実」と感じていること自体も「①サツカク」であることが多い。学問的に言えば、非常にさまざまなB脳の「バイアス」の上に成り立っている。

ただし、私がここで言う「空目」とは、存在しないものが見える、いわゆる幻視のことではなく、本当はまったくの偶然の結果なのに、そこに特別のパターンをみってしまうことである。

【 I 】、私たちは空に虹が出ると七色に見えると思う。しかし実際、それを端から教えようとすると赤、オレンジ、黄、青、紫——程度にしか見えない。色の②キョウカイも実はあいまいだ。

虹は本来、連続する色のスペクトル(帯)なので、色の紙テープを並べたような切れ目はどこにもない。それを私たちは切断してしまう。実際、虹の色が何色に見えるかは民族によって異なるという。

あるいは、私たちはしばしばC自然が作り出したランダムな文様の中に、人の顔を見る。雲、あるいは天井のシミ、集合写真をとった背景に写っている岩壁。そのようなものの中にかつて苦しめられた人びとや、その場所で自殺した人の亡霊を見る。

人間の脳は、ランダムなものの中にも何らかのパターンを見つけ出さずにはいられない。特に人の顔に似たものに関しては、非常に敏感に顔のパターンを見つけてしまうのである。

それだけではaない。他の生物の文様の中にも人は人の顔をや容易に見出す。魚の頭部に顔が現れた「人面魚」。カニの背中や昆虫にも人の顔にそっくりの文様をもつものがある。

昔、聞いた話にはDこんな説明がしてあった。人の顔をもつカニは、人びとに恐れられ、捕獲されてもすぐに放された。だから彼らは現在まで生き残ったのだ。つまり人面は、一種の擬態だというのだ。

それはおそらくひどい作り話だ。カニたちはずっと昔から、つまり人が現れてカニを捕獲する以前から、そのような形態をしていたらう。そして、カニの甲羅が人面に見えるのは、カニがそう見せているのではなく、E人間の脳に張りついたバイアスが、そこに顔を見ているのである。

それほど人間の脳は鋭敏に、かなり粗い情報の中からでも何らかのパターンを見つけてしまえるのである。(中略)

しかし、一方で、ランダムなものの中からパターンを見出す作用は、今、見てきたように、実はそのほとんどが空目なのである。

現代社会に生きている私たちにとって、脳が直感的に見ているものというのは、ないところにあるものを見、ランダムなものの中にI強引に関係性を見ている。そういう場面があるのだ。【 II 】そのような場面のほうが多いかもしれない。

ところが、私たちは自分の脳の癖に気がつかない。そう考えると、ランダムからパターンを読みだす「勘のよさ」、これが逆にマイナスに作用することがありえる。パターン化は、自然のもつ③フクザツな精妙さや④ヒミョウなズレなどを消し去ってしまうこともあるからである。

(福岡伸一『動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか』より)

注 バイアス……かたより。 ランダム……作為的でなく法則性がないこと。

問一 部①と④のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 A容易に・I強引に の意味を簡潔に答えなさい。

問三 偶然の反意語を次から選び、符号で答えよ。

A 歴然 I 当然 U 自然 E 必然

問四 部Aが慣用句になるように、二か所の空所□に漢数字を一字ずつ補いなさい。

問五 で開つた a, u, o の語について、それぞれ品詞名を答えなさい。

問六 「Ⅰ」・「Ⅱ」に当てはまる語をそれぞれ次から選び、符号で答えなさい。

ア つまり イ たとえば ウ たとえ エ ただし オ むしろ

問七 部 C は、次のどれに当たりますか。符号で答えなさい。

ア 空目 イ 存在しないもの ウ 幻視 エ 偶然の結果

問八 D こんな説明が指している部分を文中から探し、初めと終わりの五字ずつを抜き出して示しなさい。

問九 部 E について、①「そこ」・②「顔を見ている」とは何を意味しますか。文中から、①は五字以内、②は二〇字以内の語句を抜き出して答えなさい。

問十 B 欄のバイアスの働きによらないものを次から一つ選び、符号で答えなさい。

ア インクのかすれに気づかず文字を読み取る。
イ アスファルトの熱で地表が揺らいで見える。
ウ 立派になった我が子が一回り大きく見える。
エ 幸せのあまり、何もかもがバラ色に見える。

二 鮎屋「立山」で、客が数百万とも数千万ともうわさしていた骨董品の古備前の器を、店で働く少年が割ってしまいます。次は、店の主人イサムが、器をくれた古堂先生の息子・桃治に謝罪する場面です。よく読んで、後の問いに答えなさい。

「……そう、それは大変だったね。でも物はこわれるものだからね」

桃治はア素つ氣そつげなく言った。

古備前は二ごごになつてはいなかつた。三分の一が割れて飛び散つていた。あの時はイ動転してAそう見えたのだろう。

「それで修理に出してみたいのですが、B私はそつちの方に疎(うと)うございまして、桃治さんに教えていただきたいのですが」

「そうなのかい。けどあれは贋作(がんさく)だよ」

「えっ？」

「だから贋作なんだって。おやじは贋作収集の名人だったからね」

「……そうなんですか。けれど古堂先生にいただいたものですから、修繕してどうにかなるものなら手元に残したいと思ひまして」

「わかりました。ではしかるべきところを探して連絡しましょう」

電話を切つてからイサムは につままれたような気分になった。

そう言えば①器を届けた桃治も、その②カチを何ひとつ口にしなかつた。客が勝手に偵踏(てんたつ)みをしただけである。Cイサムは自分の注闊(うかつ)さに思はず苦笑(くせう)をした。

(中略 …… 修繕が終わり、イサムは桃治の屋敷に挨拶に行く。)

イサムは古備前の粗相(そそう)を詫(わ)び、修繕の代金の支払いを申し出たが、桃治は笑うだけで相手にしてくれなかつた。

彼は修繕を終えた器の写真を③トつておいたので、それを桃治に見せた。茶を運んできた夫人が興味ありげにその写真を覗(のぞ)いていた。

「いや上手いこと修繕をするものですね。驚きました」

「そうだね、骨董の修繕は日本の職人が世界でトップらしいからね。それでこれは親方がこわしたのかね」

いや、それが、と言いかけてイサムはD言葉(ことば)を飲み込み、頭を掻(か)きながら言った。

「私と若衆(わかしゅ)が二人で落としてしまいました」

それを聞いて桃治と夫人が顔を見合わせた。

「それはよございました。小僧(こぞう)さんがこわしたのでは大変でしたからね。『立山』さんの器は作造(さくぞう)さん譲(じやう)りでどれもいいものばかりですよのね」

「いや、そんなことはありません。うちの店にあるものでお客さまと店の者がこわして困るものは何ひとつありませんから……」

イサムの言葉に二人が感心したようにうなずいた。

「いいところがけですね。私たちも見習わなくてはいけないわね、あなた」

夫人が桃治に言った。

桃治は笑って頭を掻いた。夫人が口元をおさえて笑っていた。

(中略……イサムは桃治の屋敷を出る。)

交差点で信号が赤になり、イサムはぼんやりと立っていた。上空で声が生きて見上げると、一羽の鷺(さぎ)が旋回していた。鷺から目を離すと春霞につつまれた東京の街が見渡せた。

——いいところがけですね。

E 夫人の言葉と笑顔がよみがえった。

彼女に店の器を誉められたこともうれしかった。店でもほとんど話をしない夫人が今日はよく話をしてくださったと思つた。

その時、修繕の写真を興味あり気に覗いていた夫人の目が思い出された。

「それはよございました。小僧さんがこわしたのでは大変でしたからね」

耳の底で夫人の声が生きた。

——大変でしたからね……。

春の風が④イッセン、イサムの顔を叩いた気がした。

「ひよつとしてあの古備前は……」

F イサムはそう口にしてから目の玉を大きく開いた。

(伊集院静『古備前』より)

注 贋作……にせの作品。

作造さん……イサムの父親。

問一 部①と④のうち、漢字については読みを記し、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 A 乗つ気なく・イ動転しての意味をそれぞれ次の選択肢から選び、番号で答えなさい。

- ア 1 興味のない様子で 2 他人行儀に 3 内心の怒りを抑えて 4 憤りをあらわにして
イ 5 急いでいて 6 驚きあわてて 7 怒りのあまりに 8 感情を抑えきれずに

問三 [] に当てはまる一語を考えて記しなさい。答えはひらがなでもかまいません。

問四 A 那样見えたとは具体的にはどう見えたということですか。文中の言葉を用いて答えなさい。

問五 部Bについて、「そつちの方」とは何を指しますか。次から選び、符号で答えなさい。

- ア 桃治の家の近辺 イ 古備前などの骨董品
ウ 古備前の、割れなかつた面 エ 古備前が贋作かどうか

問六 部Cの場面でのイサムの心情として最も適切なものを次から選び、符号で答えなさい。

- ア 割れた古備前が思っていたほど高価でなかつたことにほつとし、冷静さを失つて事を深刻にとらえ過ぎていたことを恥じている。
イ 自分には分からないことをあつさりとして「わかりました」とうけ合う桃治のてきばきした対応に、我が身を引き較べて劣等感を抱いている。
ウ 客の勝手な噂を真に受ける前に、そもそも桃治が器を届けてくれた段階でその器のカチを確認しておかなかつたことを悔やんでいる。
エ 桃治自身、器のカチを本当にわかっているとは限らないと気づき、桃治の説明に思わず乗せられた自分の単純さがこつけいに思っている。

問七 D 言葉を飲み込みについて、イサムが飲み込んだ言葉を想像して簡潔に答えなさい。

問八 部Eについて、「夫人の言葉と笑顔」を引き出すもととなつた一文を文中から探し、初めの五字を抜き出しなさい。

問九 部Fからうかがえるイサムの胸の内を表すものを次から選び、符号で答えなさい。

- ア 桃治が自分の店に届ける前から古備前が元々割れていた可能性に、はたと思い当たつた。
イ 古備前の割れ方がひどかつただけに、完全には修復されていないのではと、疑いを持つた。
ウ 古備前が贋作ではなくやはり高価な本物だつたことを、驚きとともに直感的に確信した。
エ 少年が古備前を不注意ではなくわざとこわしたのだと気づき、激しい怒りを覚えた。

三 次の古文を読み、後の問いに答えなさい。

楚の襄王、A 晋の国をうたむとす。B 孫叔敖、これをいさめ申していはく、「園の榆の上に、蟬、露を飲まむとす。うしろに① たうらうの② をかさむとするを知らず。たうらう、また蟬をのみまもりて、うしろに黄雀のをかさむとするを知らず、黄雀、またたうらうをのみまもりて、榆のもとに弓を引いて、C 童子のをかさむとするを知らず。童子、また黄雀をのみまもりて、前に深き谷、③ しりへに堀株の あることを知らずして、身をあやまてり。これみな、D 前利をのみ思ひて、 害をかへりみざるゆゑなりと申せり。王、この時、E 悟りを開きて、晋を攻むといふこと、とどまり給ひぬ。

(『十訓抄』より)

注 楚・晋……いずれも古代の中国の国名
たうらう……かまきり
をかさむとする……襲おうとする
まもりて……じつと見つめて
黄雀……すずめ
しりへ……後ろ
堀株……掘り出した木の根っこ

問一 部①、③の読みを現代かなづかいで答えなさい。

問二 文中の「の」と同じはたらきの「の」を含む文を次から選び、符号で答えなさい。

- ア 堂の多く飛びちがひたる(を)かし。
- イ 寄りて見れば、筒の中、光りたり。
- ウ ただ春の夜の夢のごとし。
- エ 閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

問三 A 晋の国をうたむとす。について、ここでの「うた」(うつ)と同じ意味の語を文中から探して抜き出しなさい。

問四 B 孫叔敖の発言はどこまでですか。最後の五字を抜き出して示しなさい。

問五 C 童子のをかさむとするを知らず。について、次の設問(1)(2)の答えをそれぞれあとの語群から選び、符号で答えなさい。

- (1) 童子が襲おうとしている相手
- (2) 「知らず」の主語

ア 蟬 イ たうらう ウ 黄雀 エ 童子 オ 楚の襄王 カ 晋の国

問六 D 前利をのみ思ひて、 害をかへりみざるゆゑなりについて、次の設問(1)(2)の答えを、(1)は文脈から考えて、

- (2)は文中の一語を抜き出して答えなさい。
- (1) に補うべき漢字一字。
- (2) 蟬にとっての「前利」に当たるもの。

問七 E 悟りを開きての意味として正しいものを次から選び、符号で答えなさい。

- ア 主君である自分を戒めた孫叔敖に対し、心を開いて
- イ 殺生を戒める仏道の教えにはたと思い至つて
- ウ 孫叔敖の言葉の真意を正しく理解して
- エ 隣国である晋との国境を開いて